関西自然保護機構会報12：47－48，1990

巻頭言

地球環境問題と自然保護－何が大切か

池辺展生
（大阪市立大学名誉教授）

6月5日から世界環境週間が行われた。地球環境の種々の問題について国際的国内的なシンポジュームや国連関係の国際会議がマスコミを賑わしている。大気中の二酸化炭素の増加による地球温暖化，大気中の窒素酸化物や硫黄酸化物の増加によって生じた酸性雨の問題，産業廃棄物や生活廃棄物による河川水・湖沼水・内湾海水そして最後には広い外洋の海水の汚染，水の汚染から生ずる土壌の汚染，核産業や核実験の放射性廃棄物や放射性発散物による水や土壌などの放射性汚染などなど…地球環境悪化の問題はいろいろあるが，これらは全部人間が作り出したものであって，6500万年前に恐竜の絶滅をもたらしたような自然原因に因るものではない。

凡そ4～500万年前に霊長目（猿の仲間）に直立歩行のできる人科（Hominidae）が生まれ，前足が手として解放された（猿人 Australopithecus)。約200万年前に原人（Homo erectus）が現れ石器を道具として使い，さらに火を作りだすことに成功した。これは文明の始まりであるが，同時に大気を変化させる自然現象以外の環境悪化の始まりである。とはいえそれは微々たるものであり、その状態は旧人（Homo sapiens neandertalensis）の時代をへて新人（Homo sapiens）の時代に入り，1万年前以来先史時代～歴史時代～現代と文明の発達となり，そのテンポは幾何級数的にはやくなってきた。現在の2～3年は産業革命以来の発達に匹敵すると言っても過言ではない。それによる現在の地球環境の悪化は始めにのべた通りである。

人と他の動物との違いとして，二足直立歩行とか手の使用とか脳の発達とかがあげられるが，私は次のように考えたい。生物は棲む場所の環境がほぼ決まっており，環境の変化には生物体自身が適応するように変化（或は進化）していく。これに対して人間は，極言するならば，特別な例外（例えば高温高圧の処）を除いて，どのような環境の処でもその中に人の住める環境をつくりだしその中に住むことが出来る。住居としての家屋とその内部の温度の調節に始まり，船・事務所工場等の仕事場・陸上交通機関（列車・自動車など）とその為の路線・潜水艇・飛行機・ロケット等々…これらはいずれも程度の差は有るが地球環境の悪化と自然破壊を伴って始めて出来ることがらである。それもある程度までは人間生活の不可欠なものとして，また環境・自然の回復可能なものとして認めざるを得ないであろう。けれども，最近には，人間の心理的・経済的両面の欲望を急速に満たすために開発と利用がどんどん進められてきて，地球の表面と自然環境は回復不可能なほど悪化してきている。これを救うには，自然開発の停止に近い減少と，直接悪化の元凶である器具機械の使用拡大の防止が必要であり，差し当り自動車数を現状にとどめるくらいのことは必要であろう。10年後・20年後の自動車の増加を予測して，それ相当の自然開発を計画するのが現在よく行われているが，これは地球環境悪化計画とよばれてもよいと思う。

地球創世当初の大気には遊離酸素は無く二酸化炭素の形であった。30数億年前以来炭素を吸収し動物に不可欠な酸素を多量に生み出したのは，藻類に始まる植物であり，動物が現れ人類を頂点とする哺乳類にまで進化した。20世紀末の現在，人は大恩人である植物を破壊して－地球環境

にとって貴重な熱帯雨林を切り刻んで－いる。経済優先の頭を切り替える必要がきている。環境対策の会議や政策立案の時にしばしば10年先をめざす等といわれることがあり，また関連がはっきりするまで見送りなどと言われているが，その**5～10年の間に自然破壊環境悪化がどんどん進行しどうにもならなくなる恐れが多分にある**と言える。

大阪の花と緑の万博は「人間と自然の共生」をテーマとした時宜を得たものであった。世界各地の見事な植物を集めているが，これらは人工で自然ではない。場所が鶴見緑地であり，閉会後も出来るだけ多くの植物を残し，本当の「自然と人間の共生」の自然公園を，緑の少ない大阪に残すべきであろう。